

昔の滝子と川澄

『瑞穂区-その生い立ちから』昭和39年により、表題について2人の卒業生を紹介する。写真は現在の名古屋市大滝子キャンパス古墳の「八高生像」と西側の「郡道」。

第八高等学校の創立が、帝国議会で決ったのは、明治41年(1908)3月であるが、開校は同年9月11日であった。位置はもちろん、瑞穂ヶ丘と呼ばれているところで、当時は、愛知郡呼続町大字瑞穂であった。



当時八高の周辺は、すべて名物の大根畑であり、人家も少く、高辻方面は一面の水田であったといい、「郡道」自体が、八高が創立されてから開通したとのことである。

私が八高に学んだのは、大正から昭和に移る前後のことで、市電は滝子まで来ていたが、それも入学当時は、中央線のガードが建設中だったため、鶴舞公園と小針(東郊通1丁目)の間は徒歩連絡であった。滝子から東の方、桜山へかけては、大根畑ばかりであったが、珍らしく牛の牧場があったことや、高等商業学校(現在の市立大学本部)の南西辺には松並木があつて、晩秋にはよく大根が乾してあつた事を覚えている。

滝子から八高をまわって、南へ通じている郡道の両側は屋並もすっかり揃っていたが、幸い戦災にも遭わなかったため、今でも当時の面影が残っており、まことになつかしい。

第六高等商業学校は、愛知郡呼続町大字瑞穂字川澄の地に、大正10年に開校した。ここ川澄の地は、往時川澄某と呼ばれた土豪の信仰したといわれる地蔵山を中心に、その一帯は大根畠に覆われ、名古屋市西南部の工業地帯を眼下に見下し、遠くは鈴鹿、大台の山脈を一望に収める丘陵地であった。

一望さえぎるもののない大根畠の中心に建てられた当時の学園は、その大部分は雑草に覆われ校庭は残された大根の花ざかりという奇観を呈し、生徒は入寮生百名以外は、市内自宅通学生で、日々鶴舞公園を經由して延々2^{キロ}を郡道から大根畠の途なきところに畝を渡って登下校した。

市電を鶴舞公園で降り公園を抜けると南は水田地帯に連り、尾陽神社東の坂まで、家なく木影とてなく、制服制帽の制定された6月頃までは紺緋・短袴・鳥打帽・中学帽の生徒たちは日和下駄ばきで、折からの雨期には泥濘に悩まされたものであった。名古屋高商が、名古屋工場と誤られ、電車を高蔵で降ろされて、2^{キロ}余りを歩かされた話はこの頃のことで、今に残る思い出話となっている。

(2016年9月5日)